

# ヘンデル『ヨセフとその兄弟たち』における詩と音楽

高 際 澄 雄

## 序

ヘンデルの『ヨセフとその兄弟たち』*Joseph and His Brethren* は、研究者によって価値判断の大きく異なる作品である。ヘンデルのオラトリオとオペラ作品に関して浩瀚な研究書を著したウィントン・ディーンは、「すべてのオラトリオのなかでも『デボラ』および『ヨセフとその兄弟たち』は完全な失敗作の至近距離に位置している」<sup>1</sup>と断じている。ホグウッドは作曲の経緯に関する豊かな情報を盛り込んだ『ヘンデル』の中で、『ヨセフとその兄弟たち』の周辺に言及はしても、作品を正面から論じようとしていない<sup>2</sup>。その翻訳者で自身近年ヘンデルの概説書を書いた三澤寿喜も主要オラトリオ作品を論じた箇所では『ヨセフとその兄弟たち』を取り上げなかった<sup>3</sup>。

一方、ヘンデルに関して実証的で包括的な研究を行っているドナルド・バローズは、『ヨセフとその兄弟たち』についてその美点を挙げており<sup>4</sup>、ヘンデルの作品を丁寧に演奏することで名声の高いロバート・キングは、その前後の作品『サムソン』『セミリ』『ヘラクレス』と共に偉大な作品と呼んで<sup>5</sup>、この作品が低く評価されることに反発し、演奏をCDに納め、現在のところ唯一の録音演奏を残した。

この作品は、研究者が一致して認めているように、ヘンデルが傑作オラトリオを輩出した時期に作られている。ヘンデルの生涯において、劇的な転回点は1741年であった。それまでイタリアオペラの創作と演奏をその活動の中心においていたヘンデルは、聴衆の不人気にいいよ意を決し、それまで補足的な活動にとどめていた英語によるオラトリオの作曲と公演を自分の主要活動とし、イタリアオペラの作曲と演奏から完全に手を引いたのがこの年であった。その契機となった作品が、『メサイア』であることはあまりにも有名である。この作品は1742年ダブリンで初演され大成功を収めた。そして、その後も続々と傑作オラトリオが制作、公演されたのである。1743年初演の『サムソン』、1744年初演の『セミリ』、1745年初演の『ヘラクレス』および『ベルシャ

ザル』に関して、すぐれた作品であるという点で研究者の意見は一致している。

したがって、『ヨセフとその兄弟たち』の問題点は、つぎのように整理することができよう。果たして、この作品は、同時期の他の作品と同じように、偉大な作品だったのであろうか。それとも、同時期の作品とは異なって、例外的な失敗作だったのであろうか。もしそうだとすれば、その理由は何だったのだろうか。

本論では、作品の構成を調べて、この問題に答えを出したいと思う。

## 第1節 物語

オラトリオ『ヨセフとその兄弟たち』の物語は、旧約聖書『創世記』第39章から第45章までの主要な出来事から取られている。

『創世記』の最終部分は、ヨセフを中心として展開しており、イスラエルの民がどのような経緯でエジプトに移ったのかが述べられている。その点で、次の『出エジプト記』の前提をなす大切な部分である。

ヘンデルの『ヨセフとその兄弟たち』の物語を十分に理解するためには、オラトリオの物語が関連する部分だけでなく、『創世記』第27章から最終章の第50章までを知っておく必要がある。

『創世記』は、文学として読むと、特異な構成をとっている。とくにアブラハム以降の族長の記述は、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフを中心に語られる部分と、氏族の系図を語る部分が截然と分かれていることである。これは、物語として語られていない系図部分を提供するとともに、物語性に富む個々の出来事については、全体的に位置づける必要性のあることを示している。個々の出来事は単純に見えていながら、錯綜しており、理解するにはそれなりの努力を要する。ヤコブに関しては、第35章22節に次のように簡潔にまとめられている。

さてヤコブの子らは十二人であった。すなわちレ

アの子らはヤコブの長子ルベンとシメオン、レビ、ユダ、イッサカル、ゼブルン。ラケルの子らはヨセフとベニヤミン。ラケルのつかえめビルハの子らはダンとナフタリ。レアのつかえめジルバの子らはガドとアセル。これらはヤコブの子らであって、バダンアラムで彼に生まれた者である。<sup>6</sup>

しかしこれらの子を得るために、ヤコブは、第28章から第30章に示されているように、多くの苦難を経なければならなかった。カナンからバダンアラムに赴き、伯父ラバンに20年に渡って働き、見初めた従姉妹ラケルを妻として娶るために、その姉レアを先に娶らなければならなかった。ラケルと結婚したのちも、ラケルに子が恵まれず、その召使いビルハに子をもうけ、嫉妬したレアはその召使いジルバに子をもうけるように迫り、ヤコブはその求めに従った。さらに12人の子を得てから、父イサクの地カナンに戻るまでの経緯が第31章から35章までに述べられている。彼は伯父ラバンのもとから逃げだし、その追跡をラケルの機転でかわす(第31章)。恨みを買っていた兄エサウとの再会には、工夫をこらして対決を避け、兄から受け入れられる(第32-33章)。しかしカナンの地に入り、シケムの町で、娘デナがシケムに犯され、ヤコブの子シメオンとレビは、怒ってシケムの町の男子をことごとく殺し、シケムもその父ハモルも殺してしまう。ヤコブはその行為に驚き、仕返しを怖れて、その町を発ち、最終的にイサクのもとに戻る(第34-35章)。このように波乱にとんだヤコブの経験を述べた後、その系図を語った部分がこの一節である。読者は、ここで、その子の生まれた経緯と、その後のヤコブの一族の経験を反復することが期待されているのである。

『創世記』の記述は簡潔であるが、出来事の相関性を考慮すると複雑になり、多様な解釈を生み出す可能性を秘めている。ヨセフとその兄弟たちに関する部分は、ヤコブがカナンを逃げ出してから帰還するまでの上記の経緯が関係しており、読者にはそれらを踏まえながら出来事を理解することが求められている。

ヘンデルの『ヨセフとその兄弟たち』が直接関わる『創世記』の箇所は第37章から第45章であるが、ヨセフが苦難を受ける原因については、ヤコブの二人の妻、レアとラケルの対立があったことを知っていなければならない。ヤコブはラケルとの結婚を希望していたにも関わらず、その姉レアと結婚することが条件となり、ラケルと結婚してから子どもに恵まれなかったために、二人の侍女たちからも子

どもを得ることとなった。そのために複雑な関係となったのである。最終的に、ヨセフがエジプトで王の信頼を得て、その知恵により一族を呼び寄せ、兄弟たちの悪意を、神の配慮と解釈し直すことで、兄弟たちの和解を果たす。この大きな結構が、それまでの複雑な出来事に支えられて、説得力をもつのである。

『創世記』に描かれたヨセフに関する物語をまとめると次のようになる。ヤコブの12人の子供のうちで、11番目にあたるヨセフは父の寵愛を受けたため、兄たちから妬まれた。また夢で畑の束や星がヨセフが拜んだ様を見たと言って、父から叱責される。ある日、兄たちがシケムで羊を飼っていたとき、ヤコブはヨセフに兄たちのもとに行くように命じ、ヨセフはドタンで兄たちに会った。兄たちはヨセフを殺して穴に入れようとしたが、ルベンが反対し、殺さずに穴に入れようと提案し、着物をはいで穴に入れた。そこに隊商が通りかかり、ユダがヨセフを隊商に売ろうと提案した。そこで、ヨセフを銀20シケルで売ってしまった。ルベンは、穴に戻ってみるとヨセフが居ないので嘆き、兄弟たちに告げた。そこで、ヨセフの着物を雄山羊の血で浸してヤコブに見せた。ヤコブは、ヨセフが獣に食われたのだと考え、嘆き悲しんだ(第37章)。

ヨセフは隊商に連れられて、エジプトに行ったが、パロの侍衛長に買い取られ、家の采配を任される。侍衛長の妻がヨセフの容姿の美しさに惹かれ誘惑したが、ヨセフは妻から逃れた。妻はヨセフが彼女を誘惑したと夫に言ったために、怒った侍衛長がヨセフを獄屋に入れる(第39章)。

その獄屋にパロの給仕長と料理長が入ってくる。二人は、見た夢をヨセフに解いてもらうが、ヨセフの言う通りとなり、給仕長は助かり、料理長は死刑となる。給仕長は礼として、ヨセフを救い出す約束であったが、約束を忘れてしまう(第40章)。

2年後パロが夢を見る。その夢の意味を理解できないパロは心配となり、家来たちに夢解きをさせるが、誰もできない。その時、給仕長が自分の経験を思いだし、ヨセフを連れてくる。ヨセフは、夢がこれからの7年間の豊作とその後の7年の飢饉を予告しているのだと告げ、豊作の間に穀物を蓄え、飢饉に備えるように進言する。パロはヨセフの夢解きに感心し、ヨセフを国の司として召し抱える。エジプトはヨセフの賢明な統治により、飢饉の際に人々に穀物を売ることができた(第41章)。

ヤコブは飢饉の年、穀物を求めるために、ベニヤミンを除く10人の息子たちをエジプトに送り、食

料を買おうとする。兄たちを見たヨセフは、すぐに気付くが、彼らを回し者だと言って、3日間獄屋につなぐ。それから、1人を残し、末子ベニヤミンを連れてくるように命じ、穀物を与え、ひそかにその穀物袋に持ってきた銀を返す。シメオンをあとにのこした9人の兄弟たちは、帰る途中で穀物袋に銀があることに気づき、怖れる。帰って、ヤコブに事情を話し、ベニヤミンをエジプトに連れて行きたいというが、ヤコブはヨセフとシメオンを失い、さらにベニヤミンを失うことになるかもしれないと心配し、息子たちをエジプトに送ることは止める（第43章）。

飢饉は続き、ヤコブは食料を得なければならなかった。そこで兄たちを再びエジプトに使わすことにした。兄たちはベニヤミンを連れていかなければならないことを説いて、ヤコブはベニヤミンを失うことにも覚悟を決めた。多くの贈り物を携えて現れた兄たちにヨセフは祝宴を催す。そして穀物を与えて送り出すが、ベニヤミンの穀物袋の中に、銀の杯を入れるように命ずる。兄たちはカナンに向けて出発する。しかし途中、ヨセフの侍従が追いつき、なぜヨセフの銀の杯を盗んだのかと詰問する。兄弟たちは言いがかりだと穀物袋を開いて、潔白を示そうとするが、ベニヤミンの袋から銀の杯が出てくる。ヨセフの元にもどった兄弟たちは、ヨセフの奴隷となることを提案する。しかしヨセフは銀の杯を盗んだ者1人が奴隷にならなければならないと言う。これに対し、ユダが、父ヤコブにとってベニヤミンはとくに大切なので、自分が代わりに奴隷となることを提案する（第44章）。

ヨセフは感極まり、兄弟たち以外の者たちを外に出して、声を上げて泣く。そして自分がヨセフであることを告げ、ヤコブとその一族をエジプトに呼ぶように命ずる。パロはこのことを知り、ヨセフに車で一族を呼ぶように命ずる。兄弟たちはヤコブに事の次第を告げ、ヤコブはエジプトに行く決心をする（第45章）。

ヤコブは神が彼の一族が栄え、その死にヨセフが目を開じると予言する夢を見る。彼は一族を携えてエジプトに登るが、ヨセフにゴセンで会う旨を伝えさせる。ヨセフは父と再会し、その首を抱き、泣く（第46章）。

パロはヨセフの父と一族が到着をしたと知ると、その職業である牧者にもっともよい地、ゴセンのラメセスの地を与える。飢饉はいよいよ激しくなり、エジプトとカナンの人々は買う金もなくなったので、田地を捧げて、ヨセフから食料を得た。ヤコブ

は死が近づくと、ヨセフを呼んで、死後の指示をする（第47章）。

ヤコブは息子たちに細かい指示と祝福を与え、その生を終える（第48-9章）。

ヨセフは父の死を嘆き、喪の指示を与える。兄弟たちは、ヨセフの仕返しを怖れるが、すべては神慮によるものだと諭して、兄弟たちとエジプトに住み、110歳にエジプトで死ぬ（第50章）。

このようにほぼ100年に渡るヨセフの物語は、いくら第39章から第45章を選んでいるとは言え、3時間余のオペラにまとめることの困難さは明らかである。一体、台本作者ジェームズ・ミラー James Miller はどのような工夫をしたのであろうか。

## 第2節 台本

作品は、ヨセフが牢獄で自らを励ます場面で開始する。ヨセフは次のように歌う<sup>7</sup>。

Be firm, my soul! Nor faint beneath  
Affliction's galling chains!  
When crown'd with conscious virtue's wreath,  
The shakled captive reigns.  
固くあれ、私の魂よ。苦しみの鎖で  
倒れることなかれ。  
徳を意識し花輪の冠として飾れば  
足かせをつけた囚われ人も王となるのだ。

『創世記』にこの場面に相当する語句は存在しない。第41章14節の「そこでパロは人をつかわしてヨセフを呼んだ。人々は急いで彼を地下の獄屋から出した。」の前の状態を描き出したものであるが、きわめて印象的な開始となっている（1幕1場）。

次の場面では、給仕長パノア Phanor がヨセフに王の夢解きを頼む。以前自分がヨセフに夢解きをしてもらって、それがあたったこと、しかし返礼として解放をパロに頼むことを忘れてしまったことを詫げる。ヨセフは忘恩を非難するが、パロの夢解きは引き受ける。これは上記第41章14節の「ヨセフはひげをそり、着物を着替えてパロのもとに行った。」を敷衍したものである。『創世記』には給仕長の名前は記されていない。だがこの作品ではパノアの名前が与えられ、一貫して脇役としての役割を演じている（1幕2場）。

パロは夢に悩まされており、エジプトのだれもその意味を説明できるものがないという。ヨセフは夢の意味は神が明かされるもので、自分の力で言うものではないといい、エジプトの民はヨセフを讃え

る。ヨセフは、夢が7年の豊作と7年の飢饉を表すものであるから、豊作の間に蓄えをし、飢饉に備えるように進言する。パロはヨセフの夢解きを讃え、ヨセフをエジプトの司に任ずる。オンの祭司の娘アセナテは密かにヨセフの力に感心する。パロはヨセフに指輪を与えて、ザフナテ・パネアと名乗らせ、エジプトの民に服従を命ずる。エジプトの民は新しい司の就任を讃える（1幕3場）。

以上は『創世記』第41章15節から45節までの記述に即している。ただしエジプトの民の2度の称賛は描かれておらず、アセナテの感嘆の場面も存在しない。すべて作者ミラーの創作である。彼女は45節で「パロはヨセフの名をザフナテ・パネアと呼び、オンの祭司ポテペラの娘アセナテを妻として彼に与えた。」と記されているだけである。

したがって、次の場面でアセナテがヨセフへ愛を密かに歌い、ヨセフが彼女の父親に結婚を申し込んだと伝え（1幕4場）、またその後の場面で、パロとポテペラが二人の結婚を認め、神殿での結婚の儀式を準備するように命ずる一方、ヨセフとアセナテが愛の二重唱を歌う様子が描かれている（1幕5場）が、すべて作者の創作である。2人の結婚をパロとエジプトの民が祝う第1幕最終場面（1幕6場）も、『創世記』には存在していない。しかし全くの空想ではなく、『創世記』をもとにしながら、より具体的に場面を描きだしているのである。第1幕は、ヨセフがエジプトに受け入れられていく様子を巧みに描写しているというべきである。

第2幕は、エジプトの民のヨセフに対する称賛の合唱で開始する。続いてパノアがアセナテに対して、いかにエジプト人たちがヨセフに敬意を表しているかを報告する。この報告も『創世記』には存在していないが、第41章45節に「ヨセフはエジプトの国を巡った。」とあり、これを敷衍したものである。このパノアの報告に対して、アセナテはエジプトの人々がヨセフに諂っているのではなく、当然の称賛を与えているのだと言った上で、エジプトの凶作の様子とそれに対してヨセフが行った備えについて歌う。パノアは同意し、再びエジプトの民の称賛の合唱となる。これに対しアセナテは、最近ヨセフが不安げだと話す。二人の子供を見ていても、ため息をついているというのである。この子供については、『創世記』第41章50節に、「きさんの年の来る前にヨセフにふたりの子が生まれた。これらはオンの祭司ポテペラの娘アセナテが産んだのである。」と記されているが、この場面ではそれがヨセフの悲しみと結びつけられている。さらにアセナテは次のよう

に歌う。

Together, lovely innocents, grow up,  
Link'd in eternal chains of brother-love!  
For you many'n't Envy bear her pois'nous cup,  
Nor Hate her unrelenting amour prove.

愛らしい無邪気な子どもたちよ、兄弟愛に永遠に結ばれて、一緒に大きくなりなさい。

あなたたちには妬みの毒ある杯が運ばれませんように。

嫌悪の情け容赦ない鎧で身を固めることがありませんように。

このアリアは、ヨセフが父ヤコブに可愛がれたために、10人の兄たちの妬みを買ひ、穴に投げ込まれ、殺されかけた出来事に言及していることはいまでもない。ヨセフの不安の所在を巧みに表しているというべきであろう。そのため、ヨセフがつぶやいたとアセナテが伝える、次の一節が大きな意味をもつのである。

"Inhuman Bretheren! O unhappy father!

What anguish too much love for me has cost thee!

人でなしの兄たちよ。ああ不幸な父上。

私に対する過剰な愛がどれほどの苦しみを与えたことか。

アセナテにとって不可解なこの言葉の意味を明らかにしたいと述べて、この場面は結ばれる。第2幕第1場は、第1幕の明るい終結を受けて、輝かしく開始しながら、しだいに事件の展開を予想させる不安な要素を提示しており、きわめて巧みに構成されているというべきであろう。

次の場面に移ると、長兄シメオンが牢獄で、兄弟たちを呪っている。1年も牢獄で待たされていることに怒っているのである。しかし彼はヨセフへの仕打ちを思い出す。もしかしてその罪の故に兄弟たちは旅の途中で野獣に襲われ、殺されてしまったのかもしれない、と考える。そして次のように歌う。

Remorse, confusion, horror, fear,

Ye vultures of the guilty breast!

Now furies! Now she feels you here.

Who gnaw her most, when most distressed.

悔恨、混乱、戦慄、恐怖、おまえたち、罪深き胸を食い破るものよ。

さあ復讐の女神たちよ。今その胸はここにそなた

たちを感じている。

胸が一番苦しむときに、もっとも食い入るものよ。

第2幕第2場は、第1場を受けて、深い感情を表している。物語としても、ヨセフの兄たちの残虐な仕打ち（『創世記』第37章18-36節）から、飢饉のため穀物を得るための兄たちによるエジプト訪問（同第42章1-4節）、兄弟たちに対するヨセフの詰問とシメオンの人質（同第42章6-24節）、シメオン解放のための兄弟の説得とヤコブの拒否、そのための兄弟のエジプト再訪の1年の遅れ（同第37章36-38節）がこの場面に圧縮されている。文学的完成度の高い場面だと言えよう。

続く場面でヨセフは、国の司の仕事の苦勞と比べ、子どもの頃の田園の暮らしの素晴らしさを歌う。そこにシメオンが連れてこられる。ヨセフは彼の非情さを思い起こし、彼に厳しい言葉を投げかけて苦しめようと決意する（2幕3場）。この場面も『創世記』には存在しないが、作品の展開には重要な場面となっている。

次のシメオンに対するヨセフの詰問も『創世記』には存在しない。ヨセフはシメオンをいきなり詐欺師と呼びかける。そしてエジプトの飢饉の様子を調べにきたスパイであろうと迫る。シメオンは、自分の生い立ちを説明し、12人の兄弟であり、すでに10人までは見た通りだ、1番幼い弟は父が可愛がって手放さないのだと言う。これに対しヨセフは、もしその弟を見れば、言葉を信じようが、なぜ約束通り連れて来ないのか、と詰め寄る。父が末の弟を可愛がるあまり、もしものことを考えて旅をさせることができないのだ。それには、ヨセフが失われた経験が大きく左右していると、説明する。自分の名前が出されたヨセフは動揺するが、平静を装い、なぜヨセフが殺されたのかと尋ねる。シメオンは野獣に食われたのだと答える。ヨセフはすかさず、遺体が残っていたのか、と畳みかける。シメオンは怯え、反論を試みるが、ヨセフが偽りであることを見抜いていると言葉を遮り、出ていく。シメオンは、過去に犯した罪が顔に現れたのだ、一時的に罪を隠せても、神が過去の罪を暴くのだ、と歌い、牢獄に戻っていく（2幕4場）。

この会話は創作ながら、ヨセフの兄たちが彼を殺して穴に入れ、悪い獣に食われたことにしようと計画したこと（『創世記』第37章20節）、しかしルベンが兄弟を殺してはいけない、血を流してはいけないと言い、ただ穴に投げ入れることを提案したこと（同書第37章21-22節）、穴に投げ入れたのち、通

りかかった商人に銀20シケルでヨセフを売ったこと（同書第37章28節）に関する『創世記』の記述に基づいており、巧みな物語の再構成であり、緊張感あふれる場面を作り出しているといえる。

厳しい審問から戻ってきたヨセフは、妻アセナテが心配している様子を見て、その理由を問うと、妻は夫が苦しんでいるときに、自分だけ幸せになることはできないとあって、今までは清らかな水が流れるように人生を生きてきたが、ヨセフに悲しみが生まれたので、自分も悲しいのだと歌う。そこに、長く待ち望まれていた一行が着き、幼い子どもも一緒だと、パノアが伝える（2幕5場）。この場面も『創世記』には存在しないが、『創世記』第42章15節の「そこでその人々は贈り物を取り、また倍額の銀を携え、ベニヤミンを連れ、立ってエジプトに下り、ヨセフの前に立った。」の記述の敷衍であり、第2幕の最初の場面の巧みな展開となっている。

第2幕の最終場面は、ヨセフの兄弟たちへのパノアの親切な言葉で開始する。前回穀物の袋に銀を入れたのは神であり、今穀物の値を受け取ったこと、そのため彼らに罪はないこと、飢饉には援助を拒むようなことはないことが告げられる。これは、『創世記』第43章18-23節に基づき、ヨセフの兄弟たちの弁明とそれに対するヨセフの家づかしの答を6行に要約したものである。これに対して、ユダが安心を表明し、罪を意識している心にはわずかの疑いも非難の言葉に変わるのだと歌う。それに兄弟が、どんなに徳を積んでも、悪で有名になってしまうと合唱で和する。現れたヨセフにユダが贈り物を捧げ、カナン人の窮状を訴える。そして末のベニヤミンを示し、手に口づけをさせてくれるように頼む。ベニヤミンはヨセフの手に口づけをし、カナンの人々を救ってくれるように頼む。胸が一杯になりながらも、ヨセフは父の安否を尋ねる。ユダがヤコブはまだ生きてると答える。ヨセフはこれが末の息子かと尋ねる。ベニヤミンは名前を名乗る。ヨセフはベニヤミンを抱き、神が守るように祈る。ベニヤミンはヨセフが自分を「我が息子」と呼び、祝福したことに驚いて、ヨセフと父の類似から、魂の類似について歌う。ヨセフは感動を押さえきれなくなるが、一緒に食事をするように召使いたちに言いつけて出ていく。ヨセフの兄弟たちは、ヨセフの顔色が変わったのを見て驚き、合唱で神に祈り、神への信頼を表明する（2幕6場）。

最終場面は、ベニヤミン、ユダ、ルベンの台詞が創作であるものの、『創世記』第43章26-34節の記

述をほぼ忠実に再現している。しかしここで中心となるのは、ベニヤミンである。ベニヤミンは次のように歌う。

Thou deign'st call thy servant 'son'.  
And O, methinks, my Lord I see,  
With an amazing semblance shown,  
My father's image stamp'd on thee.  
Thee, therefore, I would father call;  
But the similitude of face  
Is not enough – the soul is all;  
O may his soul thy bosom grace.

あなたはしもべを息子と呼ばれました。  
ああ、おそれ多くも、あなたのお顔に我が父の類似が刻印されているように思われます。  
それゆえ、あなたを我が父と呼びましょう。  
だが顔の類似で十分ではありません。  
ああ、父の魂があなたの胸に備えられていますように。

兄弟と名乗られずにいるヨセフの苦しさをこの歌詞は浮き彫りにする。またその無垢な表現は、最後のヨセフの兄弟たちの神への祈りの歌詞とともに、最終場面の劇性を盛り上げており、『ヨセフとその兄弟たち』を特徴的な作品とすることに貢献している。この最終場面によって第2幕全体が緊張の高い構成となっていることは疑いがない。

第3幕は、アセナテがカナン一行の聖杯の窃盗についてパノアに尋ねる言葉から始まる。パノアは肯定し、一行は捉えられて、部屋に監禁されていると告げる。アセナテは忘恩の輩と非難し、パノアは大恩がしばしば忘れられると歌う（3幕1場）。この場面はもちろん『創世記』には存在しないが、このオラトリオでは前幕でヨセフと一行が楽しく食事をした後を受けて、再び波乱が起きる予告となっている。

次の場面で、アセナテがヨセフに心労の原因を尋ねる。ヨセフは自分の悲しみの深さを語るのみである。アセナテは、妻の自分に苦しみの原因が語れないところを見ると、嫉妬が原因なのではないかと、次のように歌う。

Ah Jealousy, thou Pelican,  
That prey'st upon thy parent's bleeding heart!  
Though born of love, love's greatest bane.  
Still cruel! Wounding her with her own dart.  
ああ妬みよ、親の血したたる心臓を餌食とするお

前ペリカンよ。

愛から生まれながら、愛のもっとも激しい毒素。  
常変わらず酷く、自らの槍で自らを傷つける。

キングは台本制作当時、ペリカンは自らの胸を食い破って、血で子どもを育てると考えられていたと指摘している<sup>8</sup>。Jealousyはこのオラトリオを貫く主題である。ヨセフは兄たちの妬み Jealousy のために命を狙われ、またヨセフは、あとで明らかになる通り、兄たちの弟に対する危害の可能性に対する過度の警戒感 Jealousy により、弟ベニヤミンを保護しようとして人質にする。この重要な観念を提示するのに、きわめて印象の強い比喩表現によって表しているのだと言える。

ヨセフはこのアセナテの疑念に対して否定し、飢饉の中での父の身を案じているのだと答える。パノアは、今のヨセフであれば、父を呼び寄せるのに十分な権力をもっているではないかと言うが、ヨセフはパロから宝を預かっているだけで、自分のために使うことはできないと反論し、人々の気持ちの移り易さについて歌い、出ていく。これを聞き、アセナテはパロに取りなしをする決心をして、問題解決の予感の喜びを歌う（3幕2場）。

この場面も『創世記』にはないが、ここで作者は現代的な装いをこらした。『創世記』では、ヨセフは最後に父を呼び寄せるのに、ためらわず自分の権力をパロに許可をもらわずに行使する（『創世記』第45章9-10節）。それに対して作者ミラーは議会制民主主義が定着しだした時代にふさわしく、ヨセフを理想的な政治家として描いているのである。ここで作品の新鮮さを打ち出したと考えるべきであろう。

次の場面では、不当に逮捕され憤っている兄弟を代表して、シメオンが逮捕の理由を問いたす。パノアは聖杯を盗んだ罪であることを告げる。シメオンは、もしそれが事実ならば兄弟全員で罰を受けようとする。それに対してヨセフは罪のあるものだけが、罰を受けるのだと答える（3幕3場）。この場面も『創世記』には存在しない。ヨセフがあくまでベニヤミン一人を留めようとしている意図を明確にするために重要である。

次の場面で、パノアがベニヤミンの袋から聖杯が見つかったと報告する。ベニヤミンは驚くが、ヨセフは彼の逮捕を命ずる。ベニヤミンは父に苦しみを与えろと言って嘆き、ヨセフは心動かされるが、あえて厳しく振る舞う。シメオンはベニヤミンを救い、残りの者を罰して欲しいと懇願するが、ヨセフはベ

ニヤミン一人が罪を負い、他の者は故郷に帰るように命じて、去っていく。ルベンがヨセフの顔に哀れみの表情が浮かんだと言う。シメオンはヨセフの態度を冷酷だと非難する。ルベンは、自分たちがヨセフを穴に投げ入れた際、ヨセフの必死の頼みも聞き入れなかったので、罰を受けているのだと主張する。ベニヤミンを残せば、父は悲しみに死に、自分たちが残れば、一族は飢えで滅ぶ。兄弟たちは神に祈る（3幕4場）。

この場面は『創世記』第44章14-17節に基づいている。しかしベニヤミンの驚く様が具体的に描写されており、さらにヨセフに嘆願する者が、原書ではユダであるが、この作品ではシメオンに変更されている。またヨセフの退席の情景が創作され、兄弟たちの会話と神への祈りが追加されている。ヨセフの言葉に対する兄弟達の動揺がより具体的に、精密に描き出されているのである。

続く場面では、ヨセフが戻り、なぜ躊躇して帰らないのかと問いたず。ユダは自分たちが来るまでに父がヨセフの事件で打撃を受け、ベニヤミンの身をどれほど案じていたかを切々と訴える。シメオンは、ヨセフに対して、あなたにも父があったであろうから、我々の気持ち分かるはずだと歌い、さらに、自分一人でベニヤミンの罪を受けるから、父を助けてほしいと懇願する。感動で堪えられなくなったヨセフは、人払いをし、自分がヨセフであることを明かす。兄弟たちは、驚き、怖れるが、ヨセフは怖れる心配を払い、ベニヤミンを抱いて、術策を使ったことの許しを乞う。兄たちが、自分に対すると同じように、ベニヤミンに対しても乱暴を働くのではないかと過剰の警戒意識をもったのだと説明する。シメオンは、ヨセフを讃え、神の測りがたい配慮を讃える（3幕4場）。

この場面は、『創世記』第44章18節から第45章15節までに基づいて描かれている。ここでも変更が行われている。身代わりを提案するのは、原書ではユダであるが、この作品ではシメオンとなっている。原書では、ヨセフを穴に落としたとき、殺してはならないと言ったのがユダであった（37章26-27節）。この優しさがこの嘆願の場面でも一貫しているが、オラトリオでは兄弟全員の心の変化を表すものとして長兄シメオンの嘆願を描いている。また、ヨセフが兄弟を赦す際、原書では「わたしはあなたがたの弟ヨセフです。あなたがたがエジプトに売ったものです。しかしわたしをここに売ったのを嘆くことも、悔やむこともありません。神は命を救うために、あなたがたよりさきにわたしをつかわされた

のです。」（第45章45節）と言って、神の配剤を強調する。これはヨセフが幼いとき見た夢がエジプトに一族を呼び寄せる予告として描いている『創世記』の記述意図に沿った言葉である。しかしこのオラトリオでは、その意図はシメオンの次の言葉にその考えは残されている。

O Joseph!

Just, yet mysterious are the ways of Heaven.

ああ、ヨセフよ。

正しくも、不可解なるは天の配慮。

だが、この作品で強調されるのは、ヨセフの警戒感である。ヨセフは、つぎのように謝る。

And ye,

Pardon my groundless jealousy – I fear'd

You now to Benjamin might be perfidious,

As erst to me – But I have prov'd your faith.

そしてみなさん

わたしの根拠のない警戒意識をゆるしてください。

あなたがたがベニヤミンに悪辣になるのではないかと怖れたのです。

以前にわたしにはそうでしたから。でもみなさんの誠実さを確信しました。

すでに述べた通り、兄弟たちの反目の原因が、兄たちにあってはヨセフへの妬みであり、ヨセフにあっては警戒感であって、それぞれが自分たちを中心に考えていたということになる。これが、ともに父親への愛によって、相互理解へと変わっていく。この場面は、ヨセフと兄弟たちの物語の新しい解釈を巧みに提示しているということができよう。

最終場面は、アセナテによるパロの言葉の伝達から始まる。パロがヨセフとその一族に一国をたまわったというのである。このことによりヨセフの一族に対する心配は消え、ヨセフとアセナテは、愛の息吹こそもっとも甘美であると歌い、喜びの源である神を全員で讃えて作品を結ぶ（3幕6場）。

『創世記』ではパロはヨセフの家族を呼び寄せるために、具体的な指示を出す、この作品では省略され、その代わりに愛の息吹の称賛が歌われている。ここで愛は、自らの狭量さをうち破る契機と位置づけられていると考えられるので、前の場を引き継いで適切な結びとなっていると言える。

以上、台本をある程度詳しく調べてきたが、『創

世記』を結ぶヨセフのエジプト下りは重要であり、複雑である。その主要部を巧みにまとめ、オラトリオ作品として一貫した主題を与えていることが判明する。『ヨセフとその兄弟たち』の台本は優れた文学作品であると言える。

ディーンは、作者の人柄の問題性を指摘し、またその台本の問題点を指摘している。しかし台本の欠陥は十分に根拠づけられているわけではない。ヨセフの兄弟たちの最初のエジプト訪問が省かれていることを残念がっているが<sup>9</sup>、これだけ長い物語にどのようにそれを入れることができるだろうか。またヨセフが第2幕第3場で、シメオンに会う直前、「あたたの心に突き刺さる短剣のような言葉を語ろう」と述べているが、実際にはそんな言葉は見あたらない、と批判している<sup>10</sup>。しかし実際には、ヨセフはシメオンにいきなり「おまえ詐欺師よ」と呼びかけ、最後に自らの仕打ちを思い出させるようにし向けて「お前の魂の暗い奥を見ることができるのを知らないのか」と結んでいる。この言葉でシメオンは苦しむのである。ヨセフは言うとおりの、「心を突き刺す短剣のような言葉」を語ったのである。このようにディーンの批判は、台本を詳しく調べてみると、根拠のないことが分かるのである。文学は誤解や無理解から判断されるべきではない。

ヨセフの物語は、当時の読者には人口に膾炙された物語であった。また不十分な知識しか持ち合わせない読者には、販売されていた Word Book に梗概を載せていた。まったく知識のないものに台本だけで理解することは無理であろうが、旧約聖書にある程度の知識を持ち合わせていれば、理解可能だったのである。より深い理解には、『創世記』の読み直しを求めるが、その作業によってさらに『創世記』の理解が深まる。このオラトリオ台本は優れた作品なのである。

### 第3節 音楽

ヘンデルは、ミラーの台本に対して見事な音楽を付与したが、大部になるので、ここでは特徴的な音楽について述べたい。

オラトリオは、荘重な序曲で開始するが、その形式には大きな特徴がある。主要な快速の対位法部の前に、中庸な速度の対位法部が2つ置かれているのである。そのため、活発な対位法が一層引き立つ結果となった。そのあとに和声的3拍子の部分がAABBと繰り返され、第1幕第1場に接続している。この序曲は、ヘンデルの序曲の中でも、きわめて優れた序曲の一つといっても過言ではない。

第1幕第1場で、理由の無い監禁に対し、自らを励ますヨセフの歌曲は、アリア Air と明示されており、たしかにABAのダカーポ形式をとっているのだが、Aにあたる部分ではメリスマ唱法はほとんど使われず、暗くゆっくりと歌われるので、実質的にアリオーソとなっており、Bにあたる部分は完全にレチタティーヴォ・アコンパニャートとなっている。こうして、序曲に続いて、きわめて印象の深い場面の提示となっているのである。

第1幕第3場で、ヨセフはパロに呼び出されて夢解きを行う。合唱でエジプト人たちが夢解きがうまくいくように神に祈ったあと、ヘンデルは、跳躍するような器楽の経過句を挿入した。このおどけたような経過句のおかげで、夢解きを伝えるヨセフの荘重なレチタティーヴォ・アコンパニャートが引き立っており、ヘンデルの特異な才能が発揮されているのである。

同じ場面で、アセナテがヨセフに対する密かな恋心を歌うアリアは、その伴奏に特徴がある。序奏は、管楽器を主体とし弦楽器を伴った器楽曲なのだが、歌が始まると、伴奏は通奏低音のみになり、高音部の歌唱が際立つ結果となる。こうしてアセナテの清らかさが表されているのである。

第1幕第5場で、結婚を許されたヨセフとアセナテが歌う愛の二重唱は、バロック期のこの種の歌曲の典型だと言えるであろう。ヘンデルは、そこに華やかさを加えるために、神殿まで赴く一行の壮麗な行進曲を加えた。この曲においては、とりわけ金管楽器と打楽器によって華やかさと力強さが表現されている。

第1幕の最終場である6場では、国の司となったヨセフの結婚を祝って、エジプト人とパロが歌う。最初の合唱は、華やかであることを除いて、特徴はないが、続くパロのアリアとエジプト人の合唱は、歌詞は異なりながら、旋律が同じであるために、華やかさが強調される。まず、パロがこのような夫婦は世界にはいないと、朗々としたバスのアリアで褒め称えたと、エジプト人が合唱によって、全世界へ二人の結婚の知らせが届けられるようにと願いが表明され、二人の結婚は人類の喜びと平和である、と述べられる。こうして第1幕は、華やかに結ばれている。

第2幕もエジプト人の合唱で始まる。今度はヨセフの国の司としての働きを褒め称えるのであるが、音楽的には、合唱の前半が和声法、後半が対位法となっているところに特徴がある。

この第2幕第2場には、アセナテのアリアが2曲



存在しているが、それぞれに優れた音楽が付与されている。エジプトの凶作とそれに対するヨセフの対応を歌った最初のアリアは、ノンダカーポ形式を採っており、凶作の苦しみを表す前半部とヨセフの適切な仕事ぶりを表す活発な後半部が鮮やかな対照を作り出している。ヨセフが自分の不幸を繰り返さないように、子どもたちに語りかけていると伝える、2番目のアリアでは、子どもへの愛情を表すとともに兄弟たちの仕打ちに悲しみを込めた美しいダカーポアリアとなっている。

第2幕第2場で、1年も監禁されているシメオンが兄弟たちの遅れを非難する場面は、強い印象を与えるレチタティーヴォ・アコンパニヤートと、強烈なアリアによって、もっとも忘れがたい場面を作り出している。アリアの特徴をなすのは、脅迫的な弦楽器の表現である。

続く第3場も優れている。シメオンとの面会に先だって、ヨセフは幸せだった幼少期を回想する。まず、レチタティーヴォ・アコンパニヤートで父から受けた神の創造に対する教えが述べられる、続いて、田園の素朴な生活の称賛が、ダカーポアリアによって歌われる。バグパイプを思わせる低音部と半音階進行が前半部を特徴づけている。後半部は都会の生活の害悪が急速な表現によって歌われる。再び前半部の平和な表現にもどったとき、急速な表現と対照された後であるだけに、その穏やかさが一層際だっている。このアリアは、『ヨセフとその兄弟たち』の中でも、最高のアリアといってもよいであろう。

第4場でのヨセフとシメオンとの会話のあとのシメオンのアリアも優れた作品である。ダカーポアリアの形式を採ってはいるが、ここでもアリオートに近い表現となっており、しかも甘美な旋律が使われており、きわめて魅力的である。

第4場のアセナテのアリアは、ヨセフとの結婚生活に混乱の要素が入り込んだことを嘆いたものであるが、ダカーポアリアの美質が生かされており、急速な前半部とゆっくりとした速度の後半部が見事に対照されている。

第2幕第7場は、きめ細やかな音楽構成で際だっている。最初はレチタティーヴォ・セッコ（ルベンの言葉）、続いてレチタティーヴォ・アコンパニヤート（ユダの言葉）、再びレチタティーヴォ・セッコ（ヨセフとベニヤミンとの会話）、続いてアリア（ベニヤミン）、レチタティーヴォ・セッコ（ヨセフとその兄弟たちの言葉）、最後に合唱（ヨセフの兄弟たち）と異なる4種類の演奏様式が6部に配置され、言語の表情を細かに変えている。ユダは父ヨセフの

言葉をしみじみと伝え、切々と訴える。ヨセフとベニヤミンの会話は簡素であるがゆえに直接的な訴えの力を持ち、ベニヤミンのアリアは平明で感動的である。そして最後の合唱に至っては、第3幕第4場の合唱とともに、その表現の深さにおいて、ヘンデルの合唱曲を代表するものであるといっても過言ではない。ドイツのコラール風に開始し、対位法の広がりある表現に移って、最後に和声的表現に回帰する。これは祈りの深さを表現するのに、最適の音楽となっていると言える。

第3幕には、開始に器楽によるシンフォニアが置かれており、前幕の暗さを追い払い、幸福な結末を暗示する効果をもっている。だが、最終幕で聴衆を決定的に引き入れるのは、第2場のアセナテのアリアである。嫉妬をペリカンに喩えているため、ディーンは分析の対象にさえ取り上げていないが、堂々としたダカーポ形式で書かれており、多数の半音階の進行がその比喩表現とともに、異様さを巧みに描き出している。すでに述べた通り、Jealousyと呼ばれる嫉妬心と警戒意識は、この作品で中心的な観念となっており、ヘンデルはその位置づけにふさわしい印象的なアリアを書いたのである。

第3幕の頂点をなすのは第4場である。ここでもヘンデルは、きめ細やかな音楽構成を行っている。聖杯が見つかったことに対するベニヤミンの驚きはレチタティーヴォ・セッコで表現され、自分の監禁がどのように父に打撃となるかを心配する部分はレチタティーヴォ・アコンパニヤートで表現される。さらに、ヨセフに憐れみを求める言葉は、アリオートとなり、ベニヤミンが連行されてからは、再びレチタティーヴォ・セッコにもどる。しかし、自分たちの苦難が、過去のヨセフに対する虐待の報いであつたかもしれないことに気付く部分では、レチタティーヴォ・アコンパニヤートとなって、さらに神に祈りを捧げようと呼びかける言葉は、アリオートで表現される。最後に神への祈りが合唱によって表現されている。この祈りの合唱も、第2幕終結の合唱と同じように、コラール風の和声的表現で開始し、対位法的表現に移っている。ヨセフの兄弟たちが自らの苦難をきっかけに過去の過ちに気づき、神に真摯な祈りを捧げるに至る様が、音楽によって巧みに描かれているというべきであろう。

ここから劇は急速に解決に向かう。第3幕第5場の音楽構成は単純であり、レチタティーヴォ・セッコから、アリア、レチタティーヴォ・アコンパニヤート、そしてレチタティーヴォ・セッコに戻るというものである。たしかに、ヨセフが自らの身を明かし

たとき、兄弟たちの驚きの表現は強烈であるが、短く、特にこの場面に意義を与えるものではない。また、最終場面でのヨセフとアセナテの愛の二重唱と合唱も、作品を締めくくる以上のものではない。ヘンデルが音楽を与えたオラトリオとしての作品は第3幕第4場で終わっているのである。ここにミラーの意図との若干のずれが生まれていると言えるが、ヘンデルは自らの理解で偉大な作品を創造したことは間違いがない。

### 結び ヨセフと夫婦愛

ヘンリー・フィールディングは『ジョウゼフ・アンドルーズ』で、主人公をサミュエル・リチャードソンの『パミラ』の女主人公パミラ・アンドルーズの弟と設定した。『パミラ』が出版と同時に大評判となり、大ベストセラーになったことは、イギリス文学史の有名なエピソードであるが、フィールディングはその物語に潜む矛盾を、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の冒頭で抉り出して見せたのであった。『パミラ』では、女主人公パミラが、女中として仕える主人B—氏の誘惑をはねつけ、監禁までされても屈せず、やがて身分違いの結婚を勝ち取る。副題に「淑徳の見返り」とあるように、結婚は貞節の見返りと見なされているのである。フィールディングはこの打算的な側面に着目し、彼女の弟の振る舞いで、パミラを批判して見せた。ジョウゼフは、パミラの主人の伯父に仕える召使いという設定である。B—氏の名前は、間抜けを意味するBooby氏と変えられ、伯父はSir Thomas Booby氏となっている。そのサー・トマスが亡くなり、残されたブービー夫人は、亡くなって喪の明けぬ内に、早速ジョウゼフを誘惑するが、ジョウゼフは誘惑を振り切る。こうして、パミラの「女の操」に対して、「男の操」が示される。しかもジョウゼフは、姉とは違って、結婚などを求めずに、首になってしまうのである。

ここで注目すべきは、ジョウゼフが雇い主の夫人に誘惑される場面である。これは言うまでもなく、『創世記』第39章6節の次の句を踏まえている。「さてヨセフは姿がよく、顔が美しかった。これらの事の後、主人の妻はヨセフに目をつけて言った、「わたしと寝なさい。」ヨセフはこの誘惑をはねつけて、投獄されることとなる。フィールディングはこの逸話を踏まえて、主人公をジョウゼフと名付けたのである。ヨセフのこの逸話は、当時人口に膾炙していた。『ヨセフとその兄弟たち』で台本作者ミラーもヨセフの誘惑の逸話を踏まえて台本を書いたために、ヨセフの監禁の場面から開始したのである。

ミラーの台本の特徴の一つは、すでに述べたように、妻アセナテが『創世記』で簡単に書かれているところを、物語の展開にきわめて重要な役割を負わされているところにある。第1幕ではヨセフとアセナテの結婚が重要な逸話となり、第2幕ではヨセフの不安を懸念するアセナテが強調されている。そして劇はヨセフとアセナテの愛の二重唱で結ばれているのである。すでに述べたように、『ヨセフとその兄弟たち』においては、アセナテとの夫婦愛が、兄弟たちの嫉妬と対比され、その嫉妬を乗り越えるものとして提示されているのである。ミラーは一般に考えられている貞節なヨセフ像をさらに進めて、深い夫婦愛で結ばれた人物として描き出したのであった。

ヘンデルはこの要素を十分に展開しなかった。第3幕で兄弟たちが真の困難に直面すると、彼らは神に祈る。オラトリオは、この祈りが聞き届けられたものとして、解決に向かうように聞こえるのである。そのために、最後のヨセフとアセナテの愛の二重唱は、オラトリオを締めくくる音楽としか聞こえないのである。

だがもし例えば第2幕の田園の美しさを歌ったヨセフのアリアのように、本当に魅力的な音楽が付与されていたならば、『ヨセフとその兄弟たち』はもっと別の作品となったであろう。言い換えるならば、作者ミラーの意図と作曲者ヘンデルの解釈には違いが見られるのである。台本はそれ自体で主張をもっているというべきであろう。

ディーンは、『ヨセフとその兄弟たち』をミラーという作者の経歴と詩の稚拙さ故に失敗作と決めつけたが、台本を虚心に読めば、その豊かさに気付かされ、また音楽とともに鑑賞すればその偉大さに打たれる。『ヨセフとその兄弟たち』はこの時期の他のオラトリオと並び称されるべき優れた作品と言うべきである。

(本論は、平成18-20年度科学研究費補助金研究「イギリス18世紀における音楽と詩」(課題番号18520717)の研究成果の一部である。)

### 註

1. Winton Dean, *Handel's Dramatic Oratorios and Masques* (Oxford University Press, 1959) pp.398.
2. Christopher Hogwood, *Handel* (Thames and Hudson, 1985)
3. 三澤寿喜『ヘンデル』(音楽之友社, 2007)
4. Donald Burrows, *Handel* (Oxford University Press,

1994) p.277.

5. Robert King, English Pamphlet of the CD *Handel Joseph and His Bretheren* (Hyperion, 1996) p.7.
6. テクストには『口語訳聖書』(日本聖書協会, 1959)を使用した。以下同じ。
7. テクストは Robert King, *Op. cit.* 以下同じ。
8. Robert King, *Op. cit.*, p.11.
9. Winton Dean, *Op. cit.*, P.398.
10. Winton Dean, *Ibid.*, p.398.

## Poetry and Music in Handel's *Joseph and His Bretheren*

Sumio Takagiwa

### Abstract

There are two opposite evaluations of Handel's oratorio, *Joseph and His Bretheren*. Winton Dean regards the oratorio as a failure, because the author of the libretto, John Miller, had unbalanced personality, and he could not write, as Dean claims, a proper libretto. Christopher Hogwood and Toshiki Misawa seem to hold similar opinions, while Robert King writes it is a masterpiece, and Donald Burrows points out the merits of the work.

By comparing the original story in *Genesis* and Miller's libretto, it is found that Miller wrote a good adaptation, and the comparison between the libretto and Handel's music makes us appreciate the real achievement of the work: expression of deep religious feelings at the time of difficulty. Dean's evaluation seems to depend too much upon Miller's personality, not on the artistic quality of the text itself.

(2008 年 6 月 2 日受理)